

## 「育ての心」をめぐつて

—ある母親たちの読書会より—



子 田 良 森

あるお母さんから先日こんな手紙が来た。

「——略——『先生育っていくということはどういうことなのですか。その本の元があるはずです』と問いつめた自分の姿がなつかしく思い出されます。今年も最後の読書会で、倉橋惣三選集を手にし、やっとさがしてめぐり会えた人のようで、よかったです。あと心から思っておりません。子どもの心の中から窓を開かれるこの本は、私自身一筋の道となつてしまつすぐにのびはじめております。倉橋先生の生きていかれる人生の目を通じて子どもの世界をこれほどにいろいろあたかくそしてきびしく、えがき出されていることに胸をうつものがござります——略——」

月に一度集まつてくる母親たち数十名のグループの一人からのもので、四年越しにもなるので、彼女たちは大分いろいろの本を昭和二十年十月再刊された折の序文の終りに、『この書の内容改めて考え方を直すよう迫られていることであろう。

治郎先生の現代の家族、猪飼道夫先生の日本人の体力、松田道雄先生の本、その他等々、非常に意欲的なこのお母さんたちのふん囲気いつも押され気味の迫力をさえ感じていたが今年の倉橋先生の「育ての心」がテーマであったこと十ヶ月ほどは、彼女たちの今までの勉強の良い意味での総まとめであったようと思われる。先生のまたあの美しい名文をひきつけられるように感激して読んでいたお母さんたちの姿が目の前に浮かぶ。彼女たちはあの中から倉橋先生の生き方を学びとったからであろう。そして、こういう生き方、教育の方向は、現代の母親に、教師は、もう一度

が時に即しての所論所説ではなく、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達に他ならぬからである。』と書かれていることばは意味深いことと思う。

敗戦の年の秋に再刊されたこの本の序文

『國敗れて、いちばん氣の毒なのは子どもである。が、またいちばん希望をもたせるものも子どもである。済まんねといつた心苦しさと、たのみますといった頼もしさと、それが一つにこみあげて来る心もちで、じっと見まもりもし、抱きあげたくもなる』

あれから二十年たって、先生は他界された今、経済は成長し、物質的には豊かな生活を楽しむ世の中に復興した。けれど子どもたちの育ちゆく場、教育の場は果たして恵まれているだろうか。青少年不良化の大きな波、精神的支柱を失った若者、先生のあの序文には、なお、

『わたしたちおとながどんな急転回に困惑することであろうとも、幼きもの、行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならない。』

静かに考えてみると、先生の憂えておられたようなことが、型をかえて、今の教育の場に、子どもたちの小学校に、中学校に、そして社会にみちているのではないか。

金に引き回されて、デリケートな子どもたちの心の肌など問題にしないテレビのコマーシャル等々、物質優先の軟弱ムードは子どもたちをブレークもハンドルもきかないもやしのよくな子にしてしまう。子どもを生むよりマイカーをなどと、少人数の子どもの家庭がふえ、わがまま気力のない子ができてきたり、さまざまである。

それよりもっと心の痛むのは教育の場で、先日もある熱心な校長先生から「この青少年の危機を何とか救うことはできないものか……」という趣旨の手紙をいただいた。多くの校長先生が自分たちの姿勢の七割を教育委員会にむけ三割を学校へむけているというようなことは、現実なのかもしれない。意欲ある教師は、だんだんに情熱を失いサラリーマン化してしまう。一般的の子どもたちの救われない子が数多くできてくる。問題児、非行少年が多くなる。

倉橋先生が今この世に存せば、どんなに心を痛められることであろう。困惑することであろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ、先生は決してそれを怠ってはならぬと書いておられる。先生のお心を心として、残る者は働くねばならぬと母親たちと共に強く思つたことだった。そして次代を負う子どもたちのため一人一人がよい母親になって、頼みますよと無限の願いをこめて、見まもっていきたいと話し合つた。

この先生の名著「育ての心」の中で母親たちが感銘したのは、

何といつても、先生が「幼児の教育」にのせられた数々の巻頭言であろう。この美しい、芸術的な名文は一つ一つお母さんたちの心奥深く吸いこまれていったと思う。

ここに共に学んだいくつかをあげて、現代の教育、母親と教師の問題等を考えてみたいと思う。

### 一、にじみ出る真実性

『あなたのもつていられる貴いもの、美しいもの、賢いものを、みんなそのままに受ける力は子どもではない。その意味で、折角のあなたの感化も彼らに及ばないものが多いかも知れない。そのまた逆は、あなたのもつてている欠点をも、彼らの前にある程度までは隠し、つくろうことができるかも知れない。素より意識してそうするわけではないが、そういうことで、済む場合も少なくあるまい。

ただ一つあなたのもつ真実性、あなたの性格の底からにじみ出る真実性だけは、どんな幼い子どもの心にも届かずにはいない。方法でもなく術でもなく、ある日、ある時、ふとじみ出るあなたの真実性こそは、幼い子どもの心に、強い深い感化を与えるにいない。その逆にもし、あなたに真実性が欠けている時は、それがまたそのままに、幼い子どもの心を

不真実にせずには止まないであろう。  
おそらく教師たちに対してもいわれたことばと思うが、およそ教育に携わる者として誰でも持っていない場合が多くなることが、今の日本の教育界にはなされていなければならない原則的で素朴なことだ。教師のサラリーマン化など、そらおそろしい気がする。この母親のグループに属する大学生の子どものリーダーがこんなことを書いていた。

「——略——さて皆さん本来教育という人間の営みには——もしそれが可能なものであるならば——かなり長いじみな努力を要するものと私たちは考えられ、相互の新しい何ものかをそこに作り出していくという人間の作業が、そんなインスティントなしのしや効果をあらわすはずはありませんから。私たちは与うべきよりむしろ、自身、得るべき存在なのかもしれません、ともかくも、何らかの願いをこめて彼ら二人（今年のこのグループの卒業生のこと）と接して来たと信じます。そして彼らと私たちの関係の中には幾分なりとも、およそ広い意味での人間的な真実があり、もしそれが二人の中に小さな足跡をのこしたとしたら、五年たち十年たつたいつか、思いがけないような収穫を彼ら自身がまた、われわれ自身が得るかも知れません。そして“願い”とはほかでもない、彼らが一個の人間としてたくましく豊かなものであつて欲しいということに他なりません。——後略——」

倉橋先生のいわれる「方法でも術でもなく、或る日、或る時、ふとにじみ出るあなたの真実性こそは、幼ないものの心に強い深い感化を与えずにはいない」そしてこの若い学生は、かつて小学校の折、情熱と眞実のかたまりのような若い男の先生に受け持たれ、幸いなよき思い出を持っている人であった。

## 二、ほいほい子問題

この頃、PTAの会合でも、またテレビや新聞紙上でも保護過剰の子のことが問題となる。倉橋先生はこんなに懇切丁寧に、何十年も前に忠告していらっしゃる、が先生もまさかこんな時代になるとは想像つかなかつたかもしれない。母親たちは、「一つ一つが思い当たることばかり、痛いご忠告です」と話していた。物の豊富な時代になつたこと、家庭の中の同胞数が非常に減ったこと、原因はさまざまあるが、困つた問題である。

『ほいほい子の受ける害は独立心のできないことである。一から十まで人の世話になつて、お乳母日傘で大きくなる子に、独立というような強い力が出るはずはない。すべて精神の発達は「やってみるとこと」「自分で失敗して見ること」からできてゆく。やって見ないので何の自信が出よう。失敗して見ないで何の経験が積まれよう。——中略——人手を借りなければ何一つできぬ依頼ばかりで、奮發のない意氣地なしは、

ほいほい子からできるのである。そしてこういう独立心のないものは、一生ほいほいされて居れば兎も角、山坂険しい世の中へ出ては、心棒のない車、舵のない船、坂から転がり落ちるか、波の間に漂うの他はない。我が子に財産を残してやることもいいかも知れない。我が子に学問をさせておいてやることは尚更いい。併し我が子に独立心を養つて置いてやる程大切なことはない。ただ目の前に安樂を与えて、この独立心を与えない程我が子のために實に不親切なことはない。

人は自分のために、寄つたかって世話をしてくれるもの。自分は人に命令し使役しておればいいもの。これがあたりまえだという風の考えは、ほいほい子には当然起くる。我が家育ちに同情心が薄いとは、昔からいうことだが、この同情心のない人間というものは、傍目にも憎たらしいものであるし、世の中へ出ても碌なことはない。その子可愛さで盲目になつておる親には兎に角、そうでないものには爪はじきされ、社交の上に人望の徳望のということはとても受けられない。本人も次第にそれに気がつかぬではないが、併し、気がついたとて幼時からの習慣は一寸抜け難い。又心の底から他人を尊敬し、人を人らしく思うということのない者が、いくらお形式につめたとて人望のつくわけのものではない。それも初めから低く小さく慣れたものならばいいが、ほいほい育

ちに限って、人からは羨め尊んで貰いたい。人を人とも思わないで、自分を自分とのみ思っている。往々にして世間に見る一人よがりのいやな人間というものはたいていこのほいほい子からできるのである』

倉橋先生は昭和四十三年の現代を見透してこれを書かれたわけではなく、いつの世にもこんな子はいるのだが、この頃程、この文章の母親たちにひびく時代もあるまいと思う。總てにイメージ、享楽ムード、子どもの数は少ない、こんなであつちを見てもこつちを見てもほいほいっ子である。そして中流家庭以上に問題の子、あるいは非行少年が多くなっている、現代の母親また教師の最も心すべき問題である。

### 三、母の誕生、母の成長

この個所はまだお母さんたちがもつともと、うなづいておられたところかと思う。

『先ず以て第一のおよろこびがお子さんの初の御誕生であることは申すまでもありません。しかし其の上にもう一つお祝い申上げたいのは、あなたが新しく母になられたお喜びです。——略——どんな子福者の場合でも同じである。その子その子の母としては、その子の誕生のたんびにそのたんびたんび新しく生まれるのである。兄の母では前からあっても弟の母

としては弟が生まれた時に初めてなる。つまり、どの子の母もその子の誕生と共に誕生するのである。成長するのは子ばかりではない。母も日に月に年に成長する。

ところで母はどうして成長することができるのであろうか。子の成長が母の愛育によるのはいうまでもない。母の愛育がなくては子の理想的成長は得難い。つまり子は母のお蔭で成長するのである。これに答えて、母の修養が説かれる。もとより結構である。また母の学問が勧められる。もとより必要である。それは皆、母を立派な母にする大切な途にあるに相違ない。しかし母そのものを真に成長させるものは、何が何よりわが子である。わが子を愛育することである。つまり母は子のお蔭で成長するのである。——略——さて子があつてもわが子を自ら育てなければ親として育たないのである。子を育てる母の苦労、母のよろこび、それを自ら体験しなくては、母としての成長は遂げられないのである』

「あの方はお子さんができたら変わりましたね」とはよく聞くことばで、倉橋先生のおことば通り、子を持つことによって母は成長する。お子さんを持つたびに地面に根を下ろしていくといった感じがする。落ち着いてくる、安定していく。根が二本になりますになるといよいよ安定して、また成長していく。そうしていつも感じることは、子どもの数がなるだけ多いほど、いいなあと

しみじみ思うことである。

このグループのリーダーの学生がいう「素適な子だなあと思う」とお母さんが安定しているね。僕も○ちゃんのお母さんのようなお嫁さんをもらおう」全くその通りで、安定しているお母さんの子はすくすくと伸びている。

それどこの先生の文章から考えさせられる一つのことは、幼い子はやはりお母さんが育てて欲しいと思うことである。先日も小児科のある大病院の部長先生がおっしゃっていたけれど「この頃は乳児幼児を保育所へマイカーで預けに行って仕事に出るお母さんがいる。世間一般の風潮になってきた。子どもをたくさん扱つて来た私たちとしては、やはり反対で、少なくとも三つまではお母さんが育てて欲しい、経済的に少々苦しくとも、あとでとりかえしのつかない子になる」私も同感ですと申し上げた。どんなにベテランの保母さんがいて下さっても、その子ならではという味わいのある子はお母さんの素適なところをうけついでいる子で、それは、やはり事細かな毎日の生活であろうと思う。

お母さんたちは例のごとく小言をうるさくいう前に、自分を反省し、自分を豊かにすることを考えだした。ある母親曰く「子どもの教育なんて親だということ、わかつていてわからなかつたのですが、本当はまむき、よこ顔、うしろ姿がわかつて来たら、子どもの方が変わってきました。不思議なことです」と、幼い子は二十四時間お母さんと一緒に暮らしているということを忘れないようにしたい。

「育ての心」から何度も読みきりの本を私どもは与えられた。もっとたくさんのお母さんたちの間に、こういう本が読まれたらと思わずにはいられない。結婚祝いにしたいからわけて欲して来た私たちとしては、やはり反対で、少なくとも三つまではお母さんが育てて欲しい、経済的に少々苦しくとも、あとでとりかえしのつかない子になる」私も同感ですと申し上げた。どんなにベテランの保母さんがいて下さっても、その子ならではという味わいのある子はお母さんの素適なところをうけついでいる子で、それは、やはり事細かな毎日の生活であろうと思う。

お母さんたちは例のごとく小言をうるさくいう前に、自分を反省し、自分を豊かにすることを考えだした。ある母親曰く「子どもの教育なんて親だということ、わかつていてわからなかつたのですが、本当はまむき、よこ顔、うしろ姿がわかつて来たら、子どもの方が変わってきました。不思議なことです」と、幼い子は二十四時間お母さんと一緒に暮らしているということを忘れないようにしたい。

「育ての心」から何度も読みきりの本を私どもは与えられた。もっとたくさんのお母さんたちの間に、こういう本が読まれたらと思わずにはいられない。結婚祝いにしたいからわけて欲して来た私たちとしては、やはり反対で、少なくとも三つまではお母さんが育てて欲しい、経済的に少々苦しくとも、あとでとりかえしのつかない子になる」私も同感ですと申し上げた。どんなにベテランの保母さんがいて下さっても、その子ならではという味わいのある子はお母さんの素適なところをうけついでいる子で、それは、やはり事細かな毎日の生活であろうと思う。

お母さんたちは例のごとく小言をうるさくいう前に、自分を反省し、自分を豊かにすることを考えだした。ある母親曰く「子どもの教育なんて親だということ、わかつていてわからなかつたのですが、本当はまむき、よこ顔、うしろ姿がわかつて来たら、子どもの方が変わってきました。不思議なことです」と、幼い子は二十四時間お母さんと一緒に暮らしているということを忘れないようにしたい。

#### 四、まむき よこ顔 うしろ姿

倉橋先生の有名なおことばなのかもしれない。改めてまた皆と読んだことだが、余りにまむきな今の教育ママたちに尊いご忠言である。

あるお母さんが、「先生、教育とは母親の、教師の人生觀ですかね」といった。